



【取り戻すべき祈りの生活】

聖書本文:サムエル第一1章1-18節・暗唱聖句:サムエル記第一1章27節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛する信仰の家族のみなさん！コロナ禍の中で一週間もお変わりなく、みんなお元気でしたか。引き続きコロナ禍が続いている中教会家族の皆様のお体と健康が守られますように切にお祈り申し上げます！

<1. ハナはどんな女の人でしたか。>

ハナが住んでいた頃は時代的に国家的にも暗く、危機の時代でした。道徳的にも墮落していた時期でした。宗教は極めて腐敗していた時期でした。信仰の面においては預言者たちの叫び声もなくなり、信仰の指導者も消えてしまっている時代でした。そのため、社会的にも、家庭的にも腐敗し、暗かった時期でした。この時代の中で生きていたこの女ハナはどんな人だったのでしょうか。今日の本文1-2節をもう一度読んでみましょう。聖書から知らされるハナについての内容は彼女の名前がハナということと、エフライムの山地のある町で住んでいたということです。

ハナの夫は敬虔な信仰を受け継いだレビ部族の子孫であったエルカナ(Elkanah・「神が所有しておられる」)でしたが、彼は名前通りに全ての命が神の御手にある事を心から信じてはいなかった人のように見えます。実は彼は表的には年3回シロにある神を礼拝する聖殿に家族を連れ上ってちゃんと礼拝を捧げ、いけにえを捧げていた敬虔な信仰を持っていたかのように見えますが、妻ハナが子供をなかなか産めない事に、信じている全てを所有しておられる全能なる神に祈り求め続けないで待たずに、当時周りの世間の人たちがやっていたように人間的な方法で別の女(もう一人の妻:ペニンナ)を家に連れて来て、もう一人の妻を迎え入れました。結局、もう一人の妻として家に入ったペニンナによって、子供が生まれるようになりました。夫エルカナの願い通り、子供は与えられましたが、家庭内には幸せにはなりませんでした。

ハナ(Hannah)の名前の意味は「神の恵み・慈悲」であります。彼女は自分の名前通りに生涯神の恵みを求め、頂いた女の方でした。しかし、ハナは後で家に連れられたもう一人の妻、ペニンナは、子供を産んでから、自慢しつつ、子どもを産めないハナを敵対しつつ、家から追い出そうとして、あらゆるしんどいいじめやいたずらで侮辱をかけました。本文6節には、**「彼女に敵対するペニンナは、主がハナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。」**

ハナは食事を食べることも出来ず、泣く日々が多かった傷だらけの悲しい女でした！苦しみよく泣いていた妻ハナを相変わらずとつても愛してくれた夫エルカナは、8節に、**「あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」**と慰めてくれても、当時家の家門を受け継ぐために子どもが大切だった時代の中で、自分の不妊のせいで、仕方なく、夫であるエルカナは別の女ペニンナという女を家に連れて来て一緒に住みつき、家の中三角関係で住まなければならないだけでもハナにとって苦しかったのに、結局、家の家門を受け継ぐ子供を産めたペニンナによって、どれほど苦しみを受けていたのか、それをだれにも言えない不幸の女ではなかったのでしょうか。

愛する信仰の家族のみなさん！それにもかかわらず、この女が聖書に出て来るほど、とても模範的な美しい信仰の女として、後に神に大いに祝福された理由は何だったのでしょうか。

<2. 祈りの女・ハナ>

ハナは悲しみの女であり、自身の力ではどうしても解決出来ない苦しみと悩みを抱えていた情けない女でした。彼女には子どもがいませんでした。その時代に女にとって子どもを産めないほど耐え難くつらいことはなかったと思います。毎年、子どもを連れて礼拝を捧げるために聖殿にのぼる親と子どもたちを見るたびに、どれほどつらく、苦しかったのでしょうか。さらに夫エルカナは子どもを産めないハナを待たず、ペニンナという女を家に連れて来た時、ハナの心に女性としてもどれほど耐えがたい苦しみと悲しみ、それに疎外感、孤独感、惨めさを十分感じたのではないのでしょうか(6節)。6節を読むと、後で入ったペニンナという女は無礼だったのか、ハナをいらだたせるばかりでした。

たくさんのなやみと悲しみと傷だらけのハナでしたが、彼女には大切にしていた一つありました。それは争いや嫉妬ではなく、祈りでした！この武器、祈りこそが苦しみの中にあつたこの女を生かせ、全てを耐え、乗り越えさせました。

10節をみてみてください。「ハナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、主に祈った。」彼女の祈りは声も出せなく、体震えながら内側でむせび泣き祈りでした。12～13節をみて下さい。「ハナが主の前で長く祈っている間、エリは彼女の口もとをじっと見ていた。13ハナは心で祈っていたので、唇が動いて、声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。」

ハナは自分のすべての悲しみと苦しみを知っておられる神様の御前に出て、長い時間祈りを通して、今までの自分にあつたその痛み、悲しみ、くやしき、全ての悩みを泣きながら、神の御前に切実に吐き出し、さらけ出しました。どれほど懇切に、切実に祈っていたのでしょうか。

口はしゃべっていても、声は出なく、体は激しく泣き震えながら祈っていたため、祭司エリは彼女が酔っ払っているのではないかと勘違いしてしまうほどでした！

愛するクリスチャンプレイズチャーチ信仰の家族のみなさん、みなさんは心の苦しい時、悲しみ時、悩んで思い煩っている時、何か自分ではどうしようも出来ない問題に直面する時にみなさんはどう耐えて、どう貫いて、乗り越えて行っているでしょうか。最近みなさんはどのように祈っているでしょうか。どれほど信じて祈っているでしょうか。祈った事は当然あるとしても問題の答えが与えられるまで祈り続けているでしょうか。

祈りを通して自分のすべての問題をおろし、人々の前で自分の感情を出すより、生きておられる神様に自分のすべての心を下ろすことが出来たハンナは確かに祈りを大切にしていた女に違いないと思います。

17-18節をご覧ください。「17エリは答えた。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるよう。」祭司であるエリを通して、ハンナの祈りが聞かれるという祝福をいただいたハンナはすぐこのように反応します。18節です。**「彼女は、「はしためが、あなたのご好意(こうい)を受けられますように」と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようにではなかった。」**

このハンナの姿は実際まだ祈りが答えられる前でしたが、答えられたと先取って信じて確信し、感謝しながら食事を食べ、思い煩う顔の姿もないハンナの姿でした！)

まだ神様からの祈りの答えが与えられてないのに、まだ子どもの命が授かってもないのに、神様が自分の願いをすでに聞いてくださるという信仰と確信を持ったとたん、心配と悲しみが変わり感謝と平安のうちに戻るハンナの姿をみてみてください。**彼女は漠然と祈っただけではなく、神様は自分の祈りを必ず聞き入れてくださる！そして自分の祈りが必ずかなえられる！という信仰の確信！祈りの確信をもって、信仰の行いすることが出来るほど、ハンナは実に祈りの人でした！！****彼女はたまたま一度祈っただけではありません。祈りの応答と確信があるまで続けて祈られた祈りの人でした。**

多くのクリスチャンたちは問題があれば祈ります。しかし、祈りの応答と確信が与えられるまでなかなか根気よく持続的に祈り続かない祈りの生活ではありませんか。悩みがある時に祈りますが、祈りながらも、祈ってから確信がありません。そして、**全能なる神を信じて祈る人は、祈る時も、祈ってから先取って絶対信仰の確信と感謝を持っていたハンナの姿**はまさに我々に祈りの模範を示してくれました。

19節と20節に即刻祈りが応えられます。ついに子どもが出来たのです。その子どもの名前は何ですか。**サムエル(意味:「神に求めて頂いた」**名前の意味である)でした。指導者モーセのように、暗闇のイスラエル民族を救い、神に大いに用いられた**イスラエルの最後の預言者であり、指導者であったサムエルです。「私がこの子を主にお願ひしたのだから(20節)'**です。そうです。神様にはある人に子どもを授けてくださることも、くださらないこともできます。子どもが授かったよりももっと大切なのは**ハンナが全能なる神を信じて神に求めた**ということです。

神様が授けてくださった子であったこのサムエルはどんな人となりますか。**サムエルの生涯において一番すぐれた特徴**と言えば彼は**祈りの人だった**ということです。サムエルは危機に置かれていたイスラエルのために、そして、愛する家族のために、愛する社会と隣人のためにした告白を聞いてみてください。「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、主の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう。(第一サムエル12:23)」

祈りの人ハンナの子、神様の預言者サムエルも祈りをやめることを罪だと知っていました。

このような祈りの習慣と信仰をだれから教わったのでしょうか。そうです！祈りの母だったハンナからでした。

愛するみなさん！子供は親の背中を見てその通り育てられて行きます。子供は自分の親が実際に何を本当に大切にしているかよく分かっているでしょう。

偉大な神学者であったアウグスティヌス(Augustine)のためにずっと祈りで支えて来たモニカ(Monica)はこう言われました。**“涙もって祈る母の子どもたちは決して滅ぼされない。”**

ジョセフパーカー(Joseph Parker)というすばらしい説教者であり指導者の一人がいました。彼は多くの人々と社会に感動と影響を与え、深い影響を与えましたが、その理由をパーカー先生に問うと、先生は過去を振り返りながら、このように語りました。“今も忘れられない一つの出来事があります。高校卒業後、大学の勉強のために家を出ようとした日、母は私を呼び寄せました。突然母は私に“君、一つお願いがあるの”、私は“どんな願いなの”と聞くと、彼のお母さんは“もう家から離れる今日、一つだけお願いする。ママは君を今まで祈りながら、育てて来たの。いくら疲れて、いくら忙しくても一日を祈りで始まり、祈りで閉じてほしいの。”

“私が家を出たその日から母と約束したその願いが実際今まで私の生活を支えてくれました。そして祈りたくないという誘惑思いが心に生じるたびに、母の声は神様の御声のように私の心の中で響きました。その母親の祈りへの願いがそのたびに私はその場で祈りました。今日まで僕は祈りの力でここまで生きて来ました。その祈りが私の人生を作りあげ、ここまで導いてくれました。これが人生のすえに来ていた私の告白です。”とパーカー先生は告白しました。

愛するみなさんにこのようなチャレンジを与えたいです。2章1-10節には生まれた子どもサムエルを聖殿に預け、ささげるハンナの美しい祈りの内容です。この箇所を見ると、ハンナが普段どれほど祈りの人であったのかが分かります。みなさんはよく祈る親ですか。祈る父親、母親ですか、祈りを大切に祈り続ける人でしょうか。

アメリカの有名な神学者R.A.トレイ博士は、**「忙しいからとして祈れなければ、祈らなかつた分自分に損になる」**と言われました。祈らなければ、祈らなかつた分自分に損になるとトレイ博士の指摘はとて聖書的で正しいと信じます。

ニューヨーク・タイムズ(The New York Times)は過去千年の間古今東西(ここんとうざい)の中一番優れた指導者として選ばれた人が何方だったと思いますか。何と男性ではなく、女性だった**イギリス女王のエリザベス1世(Elizabeth1/1533~1603)**でした。エリザベス1世が王として選ばれた時、彼女はたった25歳の処女でした。しかし、自分の母親が断頭台(だんとうだい)で処刑される中、一番無力で利用しやすい王を選ぼうとした奸臣(かんしん)たちの計略(けいりやく)によって選ばれた不運(ふうん)の女王でした。しかし、彼女は王となられた知らせを聞いた途端に、その場でひざまずき、「神様、もっとも足りない私ですが、歴史の中で一番優れた王の一人となるようにどうか私を哀れんで助けて下さい！」祈り、絶えず神に祈りつつ、頼っていた結果、彼女が治めていた45年間、小さかった島国のイギリスを、ヨーロッパから世界中の先進国であり、文化的にイギリスのルネサンスと呼ばれるほど文学の黄金の時代を招き、世界で一番紳士国家と呼ばれ、認められる土台を作るのに用いられたため、世界史の千年の中で一番卓越した指導者として選ばれたわけであります。

政治家であり、事業家であり、どんな分野でどんな働きをしている人であれ、全能なる神の御前でひざまずき謙遜に祈る人を、神は高く上げて下さいます！祈りは弱い人を強くさせ、小さな人を大いに用いて下さいます。どうすれば良いのかさまよう人に人生の使命と目的を明確にさせ、迷う人に知恵を与え、何も出来ないと思われる人を高く上げて豊かに用いて下さいます。

古代史で最も影響力のある人物の1人**ローマ皇帝コンスタンティヌス1世(280年-337年)**は当時、コインに他の皇帝たちが立てている姿を見て、自分は神にひざまずき祈る姿に変えるように命じました。部下たちがその理由について聞いた時、コンスタンティヌス1世は**“それが私の勝利した方法だから”**と言われました。彼は戦争に出陣する前に、必ず神の御前にひざまずき祈ったそうです。コンスタンティヌス1世にとってまず、戦う前に神に祈るということは神の力によって得られる勝利の秘訣であることを信じていたからです。

神様は祈るコンスタンティヌス1世を通して、ローマ帝国をキリスト教の国家に変えさせ、多くの業績を残すことになりました。生きておられる全能なる神の御前で祈るか、祈らないかが自身の運命を、これからの家族の運命、将来の子どもたちの運命までを変えられることを忘れないで頂きたいです。祈りは我らの人生の転換点となります。

我らがもっと祝福されてないとすれば、神の御力が足りないからではなく、神の御前でもっと祈ってないからではないでしょうか。物事がうまく行っていないとすれば、神の御力が足りないからではなく、我らが神の御前で祈ってないからではないでしょうか。仕事がかたくなに行けないのは、神の御力が足りないからではなく、神の御前で我らの祈りが足りないからではないでしょうか。

イギリスの詩人ウィリアム・クパー(William Cowper1731~1800)は「**祈りを諦める人は戦争で勝利を諦めてしまう軍人のようだ**」と言いました。祈りを諦める人は成功を諦める事業家のようです。これからの人生の中で一番大切なこと、一番影響力のあることは、生きておられ全てを治めておられる全能の父なる神の御前でひざまずき祈り続けることなのです。今日からもう一度我ら共に祈りで一日を開き、一日で閉じる！改めて神と共に交わりつつ、共に歩む生き方を取り戻しませんか。

「**一日を祈りなしで始めるのは神様と自信が無関係であり、自ら自分の力で十分に処理できるのを暗示していることだ**(ケビン・ツヨング)(To start the day without prayer is to suggest God is irrelevant, and we can handle things on our own. —Kevin Deyoung—)」

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！**信仰生活は祈りを通して生きておられ、共におられる神様の応答を常に頂き、日々神様と同行して歩む旅程**です。もし、我らが祈りを学ばなければ、一生自身の能力でしか生きることが出来ません。それにも関わらず、我らが祈らない場合も多くあります。

我らが祈り続けられない理由は、祈りなしでも自身ですべて出来るかのように思い込み、錯覚しているからかも知れません。祈りの無い生活を続ける人はこの世で神と関係のないままに生き続ける人であります。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！**神に祈りを持って委ね、任せる事は決して損ではありません！今日ハンナは祈りを通して、授けられた息子サムエルは将来、祈りを通して偉大な神の人として用いられました。それだけではなく、神様はハンナにさらに三人の息子と二人の娘、5人の新しい命をハンナに授けてくださったのです。**

今日からもう一度、我らも神の御前で祈る生活を取り戻そうではありませんか。改めて今日から、耐え難い苦しみの中でも全能の父なる神を絶対信じ、答えられるまで祈り続けていた一人の女ハンナの切実な祈りを見習い、祈る信仰と生活を回復させますように切に祈ります。皆様の日々の祈りに主が答えて、祈り課題を祝福に取り替えてくださる神の恵みが皆さんのお一人お一人の上にと愛するクリスチャンプレイズの全家庭の上に豊かにそそがれますように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！

